

甲州にまつわる古典落語の名作といえども一つ、三遊亭円朝作『鰻沢』がある。鰻沢は私の兎追いし故郷と言ってもよい。

江戸時代、江戸から身延山に参詣する法華（日蓮宗）信者は甲州街道を甲府まで、そこから青柳の宿。ここで日蓮宗大本山昌福寺、小室山妙法寺を参詣して毒消しの護符を貰って、法論石を見て鰻沢の船着き場に下りて来る。

折りしもこの日、振り分け荷物に道中差しの旅人が一人、法論石を出た頃には深々とした雪となった。鰻沢の舟運渡しへ向かう山道を何処でどう間違っただのか行けども行けども雪の中。ここを一期にお陀仏かと思われたその時、夕闇の中にぽつんとかすかな明かり。地獄で仏とはこのこと。たどり着いて一夜の宿を頼んだ。

主は女で、年のころ 27, 8。鬼気迫るような美女だ。ただ、喉元に短刀で突いたような切り傷が、着物の襟で隠しているものちらっと旅人の目に入った。

男：「いや、一時はもうこれまでかと思いましたよ。」

女：「私はオクマといいます。こんな山奥でなんにも無いけど夜があけるまで体を休めていきなさい」

男：「ありがとうございます。アッシは江戸の者でこれから身延山をお参りして願ほどきのお礼参りに参ります。ところで、ごシンゾさんは、ここいらでは滅多に無い垢抜けした方でいらっしゃいますか？」

女：「あたしも元は江戸だったんですよ」

男：「江戸と言いますと？」

女：「ええ、浅草の近くで」

男：「気を悪くさせては困りますが、ひょっとしてナカにいた花魁（おいらん）じゃ？」

女：「よく分かりましたねえ。そうです何を隠そう私は吉原の花魁でしたよ。」

男：「月乃斗花魁ですね。あなたは心中をしたと聞きましたが？」

女：「そうです、心中したのじゃなく心中し損ねて、二人で駆け落ちをしてぶざまにもここまで逃げてきたんですさあ。」

男：「そうですか、結構ですね。恋の道をそいとげてこうして二人っきりで人里はなれて。それでご亭主は今どこで？」

女：「相棒は生薬屋のボンボン。なんにも手に職がありませんから、見よう見まねの熊の胆を使った膏薬を作って売り歩いて口を糊しておりますよ。今日もこの雪の中を売り歩いていてまだ帰ってきません。」

こんな話をしながら、オクマはお勝手でごそごそ玉子酒をつくって男をもてなそうとしているらしい。男は懐からお金を出そうとしたが生憎小銭が切れていたの、ハラマキをほどいて中から 25 両の堤を破ってそこから 2 両をとりだしてオクマに渡した。オクマはその一部始終を敗れた障子の骨の間から見ていたのである。

やがて出来上がった玉子酒を振舞われた旅人は、酔いが効いてきた上に、道中の疲れと一命をとりとめた安心感がどっときてぱったりとそこに眠ってしまう。

一日働いて帰ってきた亭主に飲ませる予定の晩酌を使ってしまったオクマは近所の酒屋に酒を買いに出かける。その留守の間に亭主が帰ってくる。家に入ると女房は留守。お勝手には飲み残しのぬるくなった玉子酒が鉄瓶にどっさり入っている。「いい気なもんだ、亭主の留守に女房は玉子酒かい」と文句を言いながら男はこれを全部飲みほした。飲み終えたとたんに苦しみだした。七転八倒の苦しみ。そこへオクマが帰ってきた。

女：「おまえさん、この玉子酒を飲んだのかい？」

亭主：「そうだ、おめえの小鍋立ての残りを頂いたというわけだ。」

女：「とんでもない、あれは小鍋立てでなんかじゃない。これこれしかじか、旅の男の懐には百両からの小判がある。やつを殺して、懐の宝をごっそり頂こうという算段。すでにあいつは三畳間で死んでいるはずだよ、お前さん。」

これを聞いていた旅人はふらつく足で立ち上がると、小室山で貰った毒消しの護符を雪と一緒に飲み干して、雪道に飛び出していく。元来た道へ逃げればよいものを、それとは反対側に人家があると見当をつけて逃げ出したが、行き着いたところは千尋の絶壁。後ろを見ればオクマが点けた火縄銃の火が追ってくる。

岸壁の縁に追い詰められて絶体絶命のその瞬間、火縄銃が火を吹いた。これを合図に、男は絶壁に身を投げる。下は雪解けに流れを増した真っ黒に濁った富士川の激流。そこに繋がれた筏の上に男は落ちた。落ちた途端に道中差しの鞘が取れて筏を結んだ藤蔓を切った。筏は岸を離れて動き出す。とたんに筏を縛っていた腐った綱も切れて筏はばらばらに。男は丸太ん棒一本の上に残された。

オクマの姿は山陰に消えてどうやら一本の材木のおかげで一命を取り留めた。

男：「身延山のお祖師さま（日蓮上人のこと）のご利益。一本のオザイモク（お題目＝南無妙法蓮華経と材木をかけた）で助かった！！」



693年創建といわれる徳栄山妙法寺（小室山）本堂。1972年8月13日、大伽藍は全焼